

テングチョウ

Libythea celtis



種名

分類	テングチョウ科												
形態	前翅長 19～29mm。翅表は茶褐色の地色に、橙色斑をもつ。裏面は褐色。前翅端が突き出し、後翅は角ばる。下唇ひげ(パルピ)が前に長く伸びるので、テングの和名がある。はより赤色斑が発達する。												
分布	本州、四国、九州(対馬を含む)、南西諸島(奄美諸島、沖縄諸島、八重山諸島)。北海道では古い記録が札幌市などにあるが、現在ではほとんど見られない。東北地方北部でも局地的。												
出現期	年1～2回の発生。成虫で越冬し、本州中部の暖地では5月下旬から6月にかけて、第1回目成虫が羽化する。大部分は夏期にはほとんど活動せず、秋になって姿を現す。冬でも暖かい日には活動する。第1回目が羽化したあと、一部はすぐに交尾・産卵・第2回目の成虫として7～8月に羽化することがある。												
生態	低山地の雑木林に多く、市街地の公園、社寺林でも見られる。林縁をさかんに飛び回り、地上によくとまる。湿地で吸水したり、ヤナギ類やヒヨドリバナ、センダングサ類などで吸蜜する。卵は食樹の新芽に1個ずつ産まれる。												
食樹	ニレ科のエノキ、エゾエノキ、クエワノハエノキ。												
幼虫 (幼生期)	卵はビール樽型で乳白色、高さ0.8mm。終齢(5齢)幼虫は体長25～30mm。一見シロチョウ科のようなアオムシ型。腹脚が大きい。地色は普通は黄緑色、側面に黄色の線条がある。群棲する場合には、体側の半分が黒紫色になったり、全体が黒褐色になる。これらは相変異と呼ばれる現象とされる。												
出現時期	(月)	-	-	-	-	-	6	7	8	9	10	-	-
その他													

参考文献：検索入門 渡辺康之著 チョウ